

2022年9月

日本心理学会第86回大会公募シンポジウム

掘り起こされていない研究分野を 開拓する方法

- 実証的宗教心理学の挑戦 -

研究会を設立することの意義について

南山大学社会倫理研究所

辻本 耐

アメリカ・日本ともに19世紀末から20世紀はじめに、科学としての宗教心理学 = 実証的宗教心理学的研究が始まった

- 1899年 アメリカでStarbuckが“Psychology of Religion”を刊行

- 1897年 元良勇次郎が「禅と心理学の関係」を執筆
- 1900年 同氏が「日本現時學生の宗教心に関する調査の報告」を執筆
- 1912年 日本で最初の学術雑誌『心理研究』の創刊号において、石神徳門「青年の宗教心」が掲載される
- 1914年 同雑誌において「宗教心理號」の特集が組まれる
- 1944年 関寛之が「日本児童宗教の研究」を執筆

当時は日本でも宗教心理学への関心は高かったといえる

現在の日本において宗教心理学は、「埋もれてしまった（＝マイナー）」研究分野となった

- 1960～70年代には、何人かの研究者が細々と学会（宗教学会・社会心理学会など）で研究を発表したり、論文投稿を続けていた
- 80年代には、そういった活動も少なくなり、宗教心理学の「冬の時代」を迎える
- 90年代以降は、スピリチュアルブームでやや盛り返す

- ① 国内の心理学研究における宗教の存在感の低さ
- ② 日本人の宗教性・スピリチュアリティの捉えにくさ
- ③ 研究成果の埋没

宗教関係者でもない限り、（特に若い世代は）宗教に関わる機会が多いとは言えない

宗教のイメージは、宗教団体の起こした事件やトラブルに関するメディアの報道を通して形成される

● 宗教信者イメージ尺度（松木他, 2020）

第1因子：精神的脆弱者イメージ

世の中に悲観的である・心が弱い・騙されやすい・他人に頼りがち・精神的な問題を抱えている・人から影響を受けやすい・過激である・こわい・排他的である

第2因子：敬虔的信者イメージ

生活を宗教に強く支配されている・信心深い・・・

第3因子：人徳者イメージ

日本では宗教に対する一般的なイメージがよくないため、研究テーマとして選ばれにくいのかもしれない

現在の宗教心理学は、欧米におけるユダヤ・キリスト教的世界観に基づいて研究されている

非ユダヤ・キリスト教圏では、その文化における宗教風土に即した研究＝測定をしなければならない

- 「神の存在を信じているか？」・「天国は存在すると思うか？」といった項目では測定できない
- 日本の宗教風土とは？ = 宗教教団は嫌い・宗教行事は好き？

①あなたは信仰をお持ちですか。

[はい ・ いいえ]



信仰している宗教についてお教えてください。

[仏教 ・ 神道 ・ キリスト教 ・ 祖先崇拝 ・ その他 ()]

データに偏りが生じるため、調査（質問紙調査）において宗教的な変数は採用されないことが多い

それでも何とかして、日本人の宗教性を捉えるための
試行錯誤が続けられた

- ✓ 宗教的態度尺度（金児, 1997）：向宗教性・加護観念・靈魂観念

こういった研究成果は、大学紀要や宗教団体の機関誌
に掲載されることが多かった

- ✓ 学生が卒論として取り組む・宗教学の研究者が調査を行う

これらの成果が人目に触れることは少ない

生み出された知見が継承・洗練されることなく、著者
のリサーチクエスチョンや価値観に即した研究が増え
続けた

分析方法も不十分なことが多いため、査読付きの学会
誌に投稿されないという悪循環が繰り返された

② 日本人の宗教性・スピリチュアリティの捉えにくさ

- 測定方法の洗練
- ✓ 研究対象となる枠の設定：定義付け
 - ✓ 調査計画：調査対象となる母集団の設定
 - ✓ 調査方法の確立：尺度の開発

宗教は学際的に取り組む必要があるため、心理学だけではなく宗教学、哲学、仏教学といった人文社会分野との協働が不可欠

③ 研究成果の埋没

- 情報交換、研究成果を共有・議論する場が必要

① 国内の心理学研究における宗教の存在感の低さ

- 洗練された測定法を用いて調査を実施し、議論しながら質の高い成果を生み出すことで学会誌に投稿

その結果、人間の心理と行動の解明に宗教的変数が有効であることを示すことができる

- 学会 その分野の研究者や専門家が集まるコミュニティであり、そこで自分の研究成果を発表し、科学的妥当性を公に議論する場のこと Vickery (2000)

学問が盛んであった14世紀頃のヨーロッパにおいて、保守的な大学に反発した知識人が集まり、情報交換したことに由来

※イタリアの「プラトン学会」、フランスの「メルセンヌ学会」、イギリスの「王立学会」など

- 研究会 学会と比較して規模の小さい研究者の集まりのこと

1. 研究者・専門家同士のつながり、相互関係の維持
→ 問題点の②と③の解決
2. ピアレビューによる論文の査読と成果公表
→ 問題点①の解決
3. 研究知見の社会的還元と普及促進

1946年に設立された米国カトリック心理学会（ACPA）が前身となり、その後、1970年にPIRI（Psychologists Interested in Religious Issues）に再編された後、1976年に米国心理学会（APA）の一部門として承認された

(Reuder, 1999)

Society for the Psychology of Religion and Spiritualityは、米国心理学会の一部門であり、人々の生活と心理学の分野における宗教とスピリチュアリティの意義を理解するために、心理学的理論、研究および臨床実践を推進している。この部門は科学と臨床・応用実践の間の意見交換を手助けし、その活動を通して宗教とスピリチュアリティの心理学的側面に対する一般の人々の認識を高めようと試みている。この部門は特定の宗教と関わるものではなく、特定の宗教的立場や信念を支持したり、されたりするものではない。当部門は宗教とスピリチュアリティの心理学に関心のある世界中の心理学者や、他の研究者を歓迎する。

<https://www.apa.org/about/division/div36>

雑誌：Psychology of Religion and Spiritualityのインパクトファクターは3.673

- 1999年10月 本研究会代表の松島（横浜国立大学M）と西脇（白百合女子大学D）が青年心理学会で邂逅を果たす
- 2003年 7月 松島（東京学芸大学D）と西脇（南山大学）が研究会を立ち上げる
- 2003年 9月 日本心理学会第67回大会で、研究会主催のワークショップ（「実証的な宗教心理学的研究の展開－その歴史と現状－」）を開催
終了後にに発足を兼ねた懇親会を開催し、そこで10人程度のメンバーが集まる
- 2004年 1月 ニュースレター第1号を発行
 - 学会活動、研究発表会、読書会の主催
 - ・ ■ 研究プロジェクトの発足（西脇先生より）
 - ・ ■ 学術書の出版（川島先生より）
 - 学術誌の創刊（白岩先生より）
- 2022年 7月現在 会員数103名
同年3月にニュースレター第33号を発行

- 会員は怪しい研究（＝疑似科学：超能力・生まれ変わり・幽霊など）をしているわけではない
- 会員は宗教心理学を専門に研究している人たちばかりではない

臨床心理学 教育心理学 発達心理学 社会心理学 青年心理学 健康心理学
精神医学 看護学 老年学 教育学 社会学 宗教社会学 文化人類学 生態人類学
哲学 宗教学 仏教学 神学 生命倫理 死生学 建築学・・・

自分の研究テーマに取り組むうちに、宗教（的な変数）を避けて通ることができなかつたため、本研究会に入会した会員が多い

-
- 発表者（辻本：当時D）は、2007年に本研究会に入会
 - 専門は発達心理学・当時の研究テーマは「幼児期の死の理解」
 - 実家がお寺のため、もともと宗教心理学に関心はあつた

入会早々突然に松島先生より連絡があり、翌年の発達心理学会第19回大会の研究会主催のラウンドテーブルで話題提供を依頼される

- 私にとっての研究会の意義

情報交換、研究成果を共有・議論する場であるとともに、宗教心理学に限らず様々な分野の先生たちと接点をもてたことに意義があつた

宗教心理学「研究会」は宗教心理学「学会」になるのだろうか？

- 日本学術会議協力学術研究団体の要件

<https://www.scj.go.jp/ja/group/dantai/index.html>

1. 学術研究の向上発達を主たる目的として、その達成のための学術研究活動を行っていること
2. 活動が研究者自身の運営により行われていること
3. 構成員（個人会員）が100人以上であり、かつ研究者の割合が半数以上であること
4. 学術研究（論文等）を掲載する機関誌を年1回継続して発行（電子発行を含む。）していること

- ✓ 研究会から学会となることによる、メリットとデメリットは？
- ✓ 本研究会の活動は、代表者のリーダーシップに支えられてきた部分が大きい = 組織の運営を分散できるか？

参考文献

- 金児暁嗣, 1997, 日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学, 新曜社.
- 藤井修平, 2021, 宗教学と心理学の連携に際しての問題とその解決策, 日本心理学会第85回大会 公募シンポジウム発表資料.
- 松木祐馬他, 2020, 宗教信者イメージと受容的態度の関連, パーソナリティ研究, 29-1, 17-19.
- 松島公望, 2012, 日本における実証的宗教心理学的研究の過去・現在・未来, 心理学ワールド, 59, 9-12.
- 日本学術会議, <https://www.scj.go.jp/index.html>.
- Reuder, M. E. (1999). A history of Division 36 (Psychology of Religion). In D. A. Dewsbury (Ed.), *Unification through division: Histories of the divisions of the American Psychological Association*, Vol. 4, pp. 91–108. American Psychological Association.
- Vickery, B. C. (2000). *Scientific communication in History*. 村主朋英 (訳), 歴史のなかの科学コミュニケーション (2002). 勁草書房.

発表は以上です